

受難の火曜日の説教

金 大烈 神父 2010年3月30日(火)

《神様への“裏切り”》

「裏切る」という言葉がありますね。皆様がよく使っている言葉ではありますが、深い黙想が必要な言葉でもあります。今日は、もう一度、「裏切る」という言葉について考えてみたいと思います。

「裏切る」、「裏切り」、「裏切り者」、こういう言葉を知らない人はいないと思います。では、「裏切る」とはどういうことでしょうか。その言葉を理解するのに、同じような意味の「背信」、「背信する」という言葉があります。文語体なので、普段はあまり使わない言葉ですが、本などではよく使われます。「背信」という漢字の意味は、「信頼に背くこと」です。つまり「裏切る」という言葉は、簡単に言えば「誰かの信頼に背くこと、背を向けること」ですね。私たちは「裏切る」、「裏切り」、「裏切り者」というとき、自分とは関係ない、心に問題のある人たちのことだと考えてしまいがちです。しかし「裏切る」ということは、人間ならば誰にでも死ぬときまで心の中にある問題ではないかと私は思います。

今日の福音(ヨハネ 13・21 33,36 38)で、使途ペトロは「あなたのためなら命を捨てます。」と言いました。しかしイエス様は、「鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしのこと知らないと言うだろう。」とおっしゃいましたね。そして事実そのとおりになりましたね。

私たちには、「神様を裏切った」という思いはほとんどないと思います。しかしこの言葉の意味を正しく理解できれば、私たちは一日に何回も“イエス様を裏切っている”“イエス様の信頼に背いている”と思うかもしれません。それはどういうことでしょうか。簡単です。いつもイエス様から「愛しなさい」と言われていますね。しかし、憎しみでいつもイライラしていれば、それはイエス様の信頼に背いたことになります。「両親を大切にしなさい」というイエス様の言葉をみんな知っていますね。しかし、実際には父親や母親に対してあまり心をつくしていないのではないのでしょうか。それもやはり、裏切り者です。いろいろなことを考えてみると、やはり24時間のうちほとんどの時間、裏切っていることになるのではないのでしょうか。イエス様は、そういうことを誰よりもよくご存知でした。だから「自分の心にそんなに自信を持たないほうが良心的だ」とおっしゃっているのではないのでしょうか。

使途ペトロはたぶんその時、偽りのない心で「私はあなたのためなら命さえ捨てます。」と告白したと思います。しかしイエス様は、「あなたはいつか、私を裏切る。」と答えたのです。だから、私たちは健康な緊張感を持たなければならないのです。神様に対しては、自信を持たないようにしましょう。神様とは競走ができないからです。神様と競走して「あなたが私を信頼してくださったように私もあなたを信頼します。」というような自信感を持たないようにしましょう。

ペトロは、「命さえ捨てます」という告白をしたのに、三回も裏切りました。しかしイエス様は、彼に天国の鍵を預けました。最初の教皇として認めてくださいました。全ての人間が持っている一番大

きい弱さは、“いつも神様を裏切る可能性を持って生きている”ということです。そして、それをいつも受け入れて、赦してくださるのが神様なのです。そういう流れを把握できれば、私たちの人生は感謝をしなくてはいけないものになります。

皆様、よく考えてみましょう。「私は罪がない」と考えるような一番大きい罪を犯さないでください。私たちは、そういう意味で罪の中に生きています。そしてそれが、神様から与えられた一番大きい恵みでもあるのだと思います。私たちに「赦してください」という心さえできれば、いつでも赦していただける恵みです。たぶん皆様も私も、死ぬときまで赦しを求めなければならぬと思います。そして、そのような心がある程度できれば、人のことも赦せる余力が生じるのだと思います。

ただ一つ、絶対忘れないでほしいことがあります。それは、「私たちに赦された体験がなければ、誰かを赦してもそれは形式的な赦しになってしまう」ということです。本物の赦しではありません。

“本当にしてはいけないことをしてしまったのにもかかわらず、赦されている”という体験ができれば、誠実に、心をこめて人に手をのばすことができると思います。これが、私たちが求めなければならぬ信仰だと思います。

皆様、「クォ ヴァイス ドミネ(Quo vadis Domine)」という面白い映画^{注)}を覚えていらっしゃるでしょうか。若い世代の人は、知らないかもしれませんが、1970年代に「クォ ヴァディス ドミネ」という映画を視た事を覚えています。日本語に訳されて別の題名になっていたかもしれませんが、イエス様が亡くなってから、ペトロはあちこちに宣教の旅に出ましたね。そして迫害がはじまります。そのような状況の中、ペトロはローマで再びイエス様に会います。その時、ペトロがイエス様に聞いた言葉が、ラテン語で「クォ ヴァディス(どこに行かれるのでしょうか)ドミネ(主よ)」です。それが映画の題名になったものです。確か「ベン ハー」という映画と同じ時代に作られたものだと思います。とてもきれいな映画ですので、いつか私もビデオを捜してみたいと思います。

今日の福音の中の箇所(ヨハネ 13、36)でペトロがイエス様に「クォ ヴァディス ドミネ(主よ、どこに行かれるのでしょうか。)」と言います。このような質問をしなくてはならなかったペトロの心を推し量る必要があります。「どこに行かれるのでしょうか。」と質問をしたペトロの気持ちには、深いものがあります。きっと「全てをかけてあなたの弟子になり、ここまでついて来ました。自分の仕事も、家族も全部捨てて、あなただけを信じてここまで来たのに、あなたはどこに行ってしまうのでしょうか？ どこかへ行ってしまう、とおっしゃるのは、どういう意味でしょうか？ 今まであなただけを信頼してついて来たのに、あなたが行ってしまったら私たちはどうすればよいのでしょうか。」という気持ちだったのでしょう。

これは、本当に死んでしまいそうな痛みを感じる質問です。私たちにも、このような告白が必要なのではないでしょうか。私たちの人生の中にも、“荒れ野に1人でおかれた”気持ちになることが、何回もあると思います。その時皆様は、何を求めますか。その時こそ、「主よ。あなたはどちらにいらっしゃるのでしょうか。」という懇切な祈りが何よりも必要なのではないのでしょうか。

このような懇切な告白の祈りができなければ、皆様はまだ祈りの味を分かっていないのだとはっきり申し上げられます。「この答えを聞けなければ、私は死ぬかもしれません。」というくらいの祈りでなければ、皆様、祈っていると言わないでください。懇切なところには必ず答えがあります。

ありがとうございました。

注) ポーランドの作家ヘンリク・シェンキエヴィチの歴史小説『クォ・ヴァディス』を映画化したもの。

ヘンリク・シェンキエヴィチは1905年ノーベル文学賞を受賞した。

『クォ・ヴァディス』何度か映画化されたが、1951年のハリウッド作品(マーヴィン・ルロイ監督)が最も有名。